利他の経済学(1) はじめに

中湖 康太

実生活で経済学ほど役に立つ学問はない

筆者は、学生時代に経済学を学び、実践の場でそれがいかに有効で、役に立つものであるかを、仕事、社会・個人生活、投資等の場で実感してきました。古くは、「読み、書き、そろばん」が商売、実業を成功に導くために基本的な素養とされました。今日の経済社会においては、「読み、書き、経済学」が商売、実業の基本的素養と筆者は考えています。そのくらい役に立つ実学、それが経済学であると思います。

「自己の利益の最大化」と「顧客利益第一主義」

しかし、経済学を実践するにあたってひとつ引かかるものがあります。それは。経済学では「自己の利益の最大化」が大前提になっていることです。これは、科学としてのモデルの構築上必要なものであると思います。生活するうえで儲けは必要であり、物欲・金欲は、人間の基本的欲望のひとつと言ってよいでしょう。そして商売、事業、投資等は全て儲けることを目的に行うものであることは確かです。しかし、現実の社会においては、自己の利益のみを追求することは良しとはされていません。人間関係においては自己の利益のみを追求する人は自己中心的と疎まれます。

「利他＝社会全体の利益最大化」を前提に経済学を読み直す

企業においても「顧客利益第一」を社是とする会社がほとんどです。それは、中長期的には顧客の信頼を失ったら、事業が成り立たないからです。「自社の利益追求第一」を社是とする会社はほぼ皆無ででしょうか。それは「顧客利益第一」という考え方が、結果的には自己の利益に結び付くということを、多くの企業が経験的に知っているからです。

そこで、「顧客利益第一」を建前、表の論理、「自己利益第一」を本音、裏の論理として処理をすることは可能かもしれません。しかし、経済学が真の実学であるとするれば、それが「裏の論理」であってはならない、建前と本音が異なってはいけなないと考えます。経済学は社会科学の中でも最も、論理的、緻密かつ体系的な学問とされています。実践者としての立場から、「利他＝社会全体の利益の最大化」を前提において経済学を読み直したいと思います。

(2014.12)